

谷川 遼

早稲田大学會津八一記念博物館

はじめに

龍角寺Ⅱ期3次調査では金堂北側（第1トレンチ）と西側（第2トレンチ）を発掘した。本報告では、Ⅱ期3次調査で出土した一枚づくり平瓦の分類案と概要を提示し、瓦からみた各遺構の上限年代を検討する。

1. 既往研究

龍角寺出土瓦は、出土軒丸瓦が大和・山田寺と類似した文様構成をとること（関野1932・廣岡1933）や、印旛沼周辺の廃寺で類似文様の軒丸瓦が出土する点（服部1932・廣岡1933）で古くから注目されてきた。また、龍角寺で出土する「朝布」（麻生）や「加刀利」（香取）といった地名を刻んだ文字瓦は、東国における7世紀の文字資料として重要である（山路2000など）。

1947年以降、早稲田大学による龍角寺境内の4回に渡る調査（Ⅰ期）が実施されるが、未報告であり出土瓦の様相は不明である。そのため龍角寺の瓦研究は、龍角寺供給瓦窯である五斗蒔瓦窯や龍角寺瓦窯の調査出土資料の検討により進展し、表のように瓦と瓦窯の変遷が整理されている（清地2009・山路2014）。

ただし、龍角寺に関わる一枚づくり平瓦となると、龍角寺所蔵の縄叩き一枚づくり平瓦および龍角寺供給瓦窯と推定される北羽鳥瓦作瓦窯（未発掘）で製作された可能性が指摘される（山路2014）のみであった。

2. Ⅱ期3次調査出土の一枚づくり平瓦

平瓦の製作技法には「桶巻づくり」と「一枚づくり」が存在する。「桶巻づくり」による平

表 瓦と瓦窯の変遷（清地2009・山路2014を改変）

五斗蒔瓦窯					時期	龍角寺瓦窯				
平瓦	丸瓦	軒平瓦		軒丸瓦		軒丸瓦		軒平瓦	丸瓦	平瓦
Ⅰ	Ⅰ	ⅠA	出土	a段階	Ⅰ期前半	a段階				
				b段階		b段階				
Ⅱ	Ⅰ	ⅠB・ⅠC	出土	c1段階	Ⅰ期後半	c1段階	出土	ⅠB・ⅠC・ⅠD・ⅠE		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
				c2段階		c2段階	出土			
				c3段階		c3段階				
Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ		c4段階	Ⅱ期	c4段階				

瓦の製作は、古代中国に始まり、韓半島を経て日本に伝わった。一方、「一枚づくり」による平瓦の製作は平城京の造営に伴って開始する。関東では例外もあるが、国分寺造営前後、すなわち8世紀中頃から使用される技法である。本調査では両者ともに出土しており、桶巻づくり平瓦をⅠ群、一枚づくり平瓦をⅡ群として大別した。

本調査で、Ⅱ群平瓦は出土平瓦全体（約200kg）のうち約40%（約80kg）出土した。これらは以

下のように細分できる。

Ⅱa. 縄叩き

Ⅱb. 凸面を木材によって調整

Ⅱc. 凹凸面に離れ砂、糸切痕が明瞭

Ⅱd. 凹凸面を黒色に^{いぶ}燻し加工

以下、各分類の概要を説明する。

- a. SX1502、SX1505、SX1507などから出土（約20 kg）。縄の太細などで細分可能である。下総国分寺や長熊廃寺出土の縄叩きの一枚づくり平瓦との比較が必要である。
- b. SK1501、SX1502などから出土（約14kg）。凸面を板材で調整した際の痕跡である刷毛目が残る。胎土に雲母を含む点が特徴的である。製作年代は不明であるが、SK1501は一括廃棄土坑であり、出土土器の年代から8世紀末の年代が与えられている。また、特徴的な調整痕跡を残す瓦群であるため、他遺跡での類例を探す必要がある。
- c. 第1・2トレンチ表土やSK1508、SM1522などから出土（約22kg）。凹凸面に粘土塊から粘土板を切り出す際の痕跡である糸切痕が明瞭に残る。また凹凸面に瓦を成形する台から瓦を剥がしやすくするために使用する離れ砂の痕跡が目立つ。本瓦群は、中世に製作されたと推測できるが、Ⅱ期3次調査では伴う軒瓦が出土していないため正確な年代は不明である。
- d. 第1・2トレンチ表土、SM1522から少量出土。いわゆる燻し瓦である。燻し瓦は一般的に16世紀後半から製作されるため、本瓦群も16世紀後半以降の製品であろう。

3. 瓦からみた各遺構の上限年代

それでは本調査で検出した、主な遺構の上限年代を平瓦から検討する。

- SX1504：柱もしくは礎石の抜取穴の可能性が指摘されている（[城倉ほか2017](#)）。一枚づくり平瓦は出土せず、桶巻づくり平瓦（Ⅰ群）のみ出土。7世紀後半以降。
- SX1505：柱もしくは礎石抜取穴の可能性あり。Ⅰ群・Ⅱa・Ⅱbが出土。8世紀末以降。
- SX1506：柱もしくは礎石抜取穴の可能性あり。

瓦の出土なし。

- SX1507：柱もしくは礎石抜取穴の可能性あり。Ⅱa・Ⅱbが出土。8世紀末以降。
- SK1508：中世の土坑。Ⅱa・Ⅱcが出土。中世以降。なお、本土坑からは明銭が出土している。
- SM1512：基壇の掘込地業。桶巻づくり平瓦（Ⅰ群）のみ出土。7世紀後半以降。なお、Ⅰ群平瓦は平行叩きである。
- SM1513：基壇の掘込地業。SM1512の下層に位置する。瓦の出土なし。
- SD1521：SM1522造成に伴う大規模掘削の痕跡か。Ⅰ群・Ⅱa・Ⅱcが出土。中世以降。
- SM1522：近世住職墓造成に伴う盛土の可能性が高い。Ⅰ群・Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc・Ⅱdが出土。16世紀後半以降。

おわりに

Ⅱ期3次調査で出土した一枚づくり平瓦の検討を中心に、龍角寺の古代～近世にいたる瓦を概観した。龍角寺縁起に記される通り（[田中1938](#)）、龍角寺の歴史は幾度もの火災とそこからの復興である。また、中世は金沢称名寺との関係、近世は東叡山寛永寺との関係など他寺院との関わりも深い。今後も古代～近世の長いスパンで龍角寺と地域の関係を考究する必要があるだろう。

引用文献

- 城倉正祥ほか2017「下総龍角寺の発掘（Ⅱ期3次）調査―遺構編―」『プロジェクト研究』12
- 清地良太2009「龍角寺文字瓦の造瓦技法」『房総と古代王権』高志書院
- 関野 貞1932「龍角寺銅造薬師如来像及古瓦片」『歴史教育』7-4
- 田中喜作1938「龍角寺縁起（公刊）」『美術研究』81
- 服部勝吉1932「龍角寺塔心礎と古瓦」『寶雲』4
- 廣岡城泉1933「下総龍角寺」『新更』4-1
- 山路直充2000「下総龍角寺」『文字瓦と考古学』日本考古学協会第66回総会
- 山路直充2014「瓦の編年」『古代学研究所紀要』22